

《プロム・ガレリア・クラシコ》#1 アレクサンドロス大王なぜ大王なのか？

記入：2019年9月18日 小林 朋子

世界が当たり前前に感じているのに、日本が最も疎い教養は、なんといっても【古代ギリシャ・古代ローマ】に関するものでしょう。この二つの偉大な時代を通して、いえ、全人類史を通して、世界が最も偉大な人物と認識しているのが、この二つの時代の間には生きてきたアレクサンドロス大王です。

紀元前356年、まだギリシャの辺境の地といわれたマケドニアに一人の男の子が誕生しました。アレクサンドロス3世。若干20歳で王位を継承し、ギリシャの地からインダスのほとりまで、矢のように駆け抜け、わずか32歳と11ヶ月の生涯を燃やし尽くした【アレクサンドロス大王】の誕生です。

人類の歴史の中で、世界を変える偉業をなした王はあまた存在しますが、その中で、【大王：THE GREAT】の称号がつくのはわずか数名です。アルフレッド大王・シャルマーニュ大帝・コンスタンチヌス大帝・・・THE GREATの王たちに共通しているものがあります。

一つは『信仰心』。今私たちが思う信仰心とはちょっと違うかもしれませんが・・・自分がこの歴史の狭間で“神”から“そうすべく”選ばれたという自負。偉大な力を持ちながら、さらに自分より上に何者かの存在を認める心。これが俗に言う『大儀』となって、偉業はすべて正当化されます。

『我欲』では大きな仕事は成しえない…『利他』の精神こそ、偉業を成す原動力です。

そしてもう一つの共通点…それは『教育』です。親から授かった『教育の場』と出会う『人』。これは人を育てる大きな要因です。どの大王にも「この親にしてこの子あり」の「この親」が存在しています。それぞれの親たちはそれぞれにベストを尽くした教育をわが子に授けています。ベストというのは決して、権力や財力・階級に片寄らない『全人的教育』です。

アレクサンドロスの家庭教師はかの有名なプラトンの一番弟子アリストテレス。没落した古代ギリシャに代わり力を付けたマケドニアは、アテネから多くの知識人や芸術家を呼び寄せ、ギリシャ文化が花開いていました。アリストテレスもその一人。わずか3年間という短い期間でしたが、王の世継ぎのアレクサンドロスに帝王教育をしたのです。

トップに立つ人間に必要な資質とは何か、これからの世界に必要なものは何か、自己の確立・人間の尊厳、「自由とは何か」「正義とは何か」「国家とは何か」…古代ギリシャの『知』を余すところなく授けられ、世界は広い、東へ行けばまだ人が踏み入れたことのない世界がある…と教えられたアレクサンドロス。東への夢が広がります。こうして、アレクサンドロスは王位についたとたん目の前のペルシャをやっつけ、【東征】への道をひた走るのです。

東征を始めたころの逸話としてこんな話が残っています。

財政難であったにもかかわらず借金までして、出征する兵士にありったけのものを与えてしまうアレクサンドロスに、側近の者が聞きます。「王には何が残るのですか。」アレクサンドロスは迷いなくただ一言、「希望だ!」。

この逸話は世界の誰もが大好きな話。高潔な指導者・トップの人間の素養として例に挙げられるお話です。

私たちが彫像やモザイクで知っているアレクサンドロスは、若くてたくましくて、その目はいつも遠く

を見ています。東征の始まったころの彼は、物欲もなく清廉潔白・勇猛果敢な希望に満ちたギリシャ（西洋文化）の二十歳の若者でした。しかしギリシャが野蛮と思っていた『東』へ行くにつれ、東の文化にも良いところ学ぶべきところを見出し積極的に取り入れます。行く先々に造る「アレクサンドリア」という街には、ギリシャ神殿と共に現地の文化が融合して新しい文化が生まれました。

彼が到達した最西端、サマルカンドやカブールには、その先の砂漠のさらに東へと行く道ができ、これがのちのシルクロードになります。そしてカブールには紀元前 200 年ころには東西文化が行き交う世界最古の国際市場もでき、あのアフガン戦争で破壊されるまで営々変わることない姿で存続していました。

洋の東西で別々に発達していた文化が融合したのです。

現在アカデミーでは、アレクサンドロスは地球初の【東西融合】を果たした偉大な人物と認識されています。人類の歴史の大転換を起こした人物と、学術的にも認定されたのです。

アレクサンドロスなんて西洋の英雄でしょ…と思ったら大間違い。大王が征服したはずのかつてのペルシャ帝国一帯にこんな話が伝わります。ペルシャ王ダレイオスが亡くなる時、アレクサンドロスの手を取り、『コノ世界を頼んだぞ』と言ったというのです。現在もイスラム圏では、最も偉大な王や指導者には「イスカンダール」という名を付けます。これは定冠詞を付けると「アル・イスカンダール」。つまりアレクサンドロスのアラビア語読みです。敵の人々にさえも、偉大な王と末代までも褒め称えられる人物は、「大王」が付く人達の中でも唯一アレクサンドロスだけ。2300 年前、わずか 32 年しかこの世にいなかった若者を、敵対する洋の東西の人間がこぞって褒めたたえる…こんな人間がいるのでしょうか。

だからこそ、アレクサンドロスには大王中の大王という名がふさわしいのです。

このお話は世界の常識。アレクサンドロス大王の顔が思い浮かぶのも当たり前。

いま、【ガレリア・クラシコ】には、このアレクサンドロス大王のスクリーンがかかっています。大王が死して 200 年ほど後のポンペイで描かれたモザイク画。LCA 小学校のエントランスにも掲げてある壁画です。ペルシャ王ダレイオスに打ち勝つ「イッソスの戦い」の場面ですが、アレクサンドロスの瞳は、ダレイオスを超え、さらに遠く東を見つめています。はるか彼方に、彼は何を見つけようとしているのでしょうか？

わずか 22 歳ではじめた東征の戦いは、なぜか、祈りの道のりでもありました。途中途中で彼はその地の神を祀る神殿に祈りを捧げています。彼は何を祈っていたのでしょうか？

アレクサンドロスにとっての『希望』とは一体何だったのでしょうか？

それは、この地球を一つにし、戦いのない世界を造ることだったのかもしれない…と、戦争の絶えない地球を見るたび、世界の人々はアレクサンドロスの瞳に思いをはせています。